

『古代アメリカ』 *América Antigua*

第 23 号, 2020年, 抜刷 (pp.51-77)

<論文>

痩せっぽちと骨

— 後古典期後期ユカタン・マヤにおける「戦勝」概念の認知意味論的分析 —

郷澤圭介

(東京外国語大学大学院総合国際学研究院)

Los flacos y los huesos

— Un análisis semántico-cognitivo del concepto de la victoria entre los mayas yucatecos del Posclásico Tardío —

Keisuke Gozawa

(Universidad de Estudios Extranjeros de Tokio, Instituto de Investigación en los Estudios Globales)

古代アメリカ学会

Sociedad Japonesa de Estudios sobre la América Antigua

Japan Society for Studies of Ancient America

『古代アメリカ』23, 2020, pp.51-77

<論文>

痩せっぽちと骨

— 後古典期後期ユカタン・マヤにおける「戦勝」概念の認知意味論的分析 —

郷澤圭介

(東京外国語大学大学院総合国際学研究院)

【要旨】

メキシコ・ユカタン半島北部先住民民族ユカタン・マヤ人の先スペイン期の戦争に関して、これまでは武器や戦術等、軍事力行使に関する議論に終始していた。本稿では、後古典期後期（14世紀～16世紀頃）の彼らの戦争に関する諸概念のうち「勝利」について考察する。マヤ軍事史研究で従来使用されている史料にほとんど言及のない彼ら固有の戦争観を理解するために、植民地期に編纂されたマヤ語彙集を使い、言語学的手法である認知意味論的分析によって戦勝に関する各単語の意味範囲を復元する。「戦争に勝つ」を意味する *DZOYAH* (ツオイサフ) と「戦争で屈服させる、捕虜にする」を意味する *BACZAH* (バクサフ) を形態素レベルで分析することで、*DZOY* からは「痩せっぽち」、*BAC* からは「骨」という基本的意味を導く。また、相手の体力と気力を奪い自分の影響下に置くことが、不必要な犠牲や損害を避けるための社会の暗黙の戦勝ルールであったことを明らかにする。

【キーワード】

マヤ、戦争、後古典期後期、勝利、認知意味論的分析

【目次】

1. はじめに
 2. *DZOY* (ツオイ) : 痩せっぽちと戦勝
 3. *BAC* (バク) : 骨と戦勝
 4. ユカタン・マヤの戦勝概念
 5. おわりに
-

1. はじめに

1-1. 先行研究の問題点

メキシコ・ユカタン半島 (Península de Yucatán) 北部の先住民民族、ユカタン・マヤ人 (mayas yucatecos) の後古

典期後期（14世紀～16世紀頃）軍事史に関しては、現在に至るまで武器や防御設備、軍事組織、軍事力運用という「目に見える現象」に議論が集中してきた^(註1)。先行研究では、16世紀のスペイン軍による征服戦記録、植民地期（16世紀～19世紀初頭）初期にマヤ古老が記録者に語った先スペイン期の戦争に関する報告書等の文献を分析することで、当時のユカタン・マヤの軍事力運用能力の高さの証明が試みられた。さらに、古典期（3世紀～10世紀頃）の各遺跡において出土・確認された武器の遺物や防御遺構、武装した人物像、戦闘場面を描いた壁画等の考古学史料も併せて利用することで、より具体的な組織の復元と、復元した軍事構造を通してのマヤ社会の構造変化理解が試みられた。

例えばハッシング（Hassig）は、軍事技術の進歩を議論の中心に据え、彼らの戦争の歴史を再現しようとする。後古典期に使用されていた武器のタイプから当時の戦術を復元し、これを古典期のものと比較しその変化からマヤの社会構造の変化について議論した[Hassig 1992:6-11, 155-161]。一方レペット・ティオ（Repetto Tió）は、近代軍事理論を前提にマヤの戦術と戦略の復元を試みた。この理論に合致する記述を植民地期文献から探し、理論の補強に利用した上で、後古典期ユカタン・マヤ人の軍事力運用能力が古典期よりも高かったと結論付けた[Repetto Tió 1985]。テヘダ（Tejeda）はこの二名の研究者より緻密な植民地期文書データ分析を展開しているものの、その解釈においては世界の一般的な戦争形態や戦争の要因、徴兵人口率、軍事行動のコスト計算等、現代軍事理論の合理的な法則を用いている。また彼の関心は、常に防御遺構や武器等の考古学史料の解釈に向けられている[Tejeda 2012, 2017]。

これら先行研究が当時のマヤの軍事組織の解明に大きく貢献したことは間違いない。問題は、彼らがユカタン・マヤ人自身の世界観に現れる概念体系を軽視し、西洋近代において自明とされてきた軍事理論の前提に、時間も空間も大きく離れたマヤ人の戦争データを当て嵌めようとしてきたことにある。先行研究がそうせざるを得なかった理由の一つに、当時の先住民が自らの言葉で軍事全般や戦争概念について語った文書が残されていないことが挙げられよう。他方征服者スペイン側の文献にも彼らの戦争に対する価値観等、視覚的にとらえにくい思考様式についてはほとんど明記されていない。なぜなら当時のスペイン人は先住民固有の概念に対して関心が薄く、興味を持っていた者でもマヤ人が説明した内容を、自分たちの文化的要素であるスペイン語および西洋概念にもとづいて解釈、簡略に記述したからである[Relaciones histórico-geográficas de la gobernación de Yucatán 1983:XI-XLVI]。メソアメリカ文化圏だけでなく、アメリカ大陸の他の地域における軍事史研究においても同様の指摘が可能である。

では後古典期後期のユカタン・マヤ人にとって「他者」である我々が彼らの戦争に関する世界観を理解するためにはどうすればよいか。人間は言語を通じて世界の認識を達成し、自分たちが認識した概念を「意味」として言葉によって表してきた[松本 2003:4-7]。以上のことから、本稿ではユカタン・マヤ人が用いていた戦争に関する各語を最小単位（形態素）まで分解し、その意味を言語学的に解釈することで、彼らの戦争概念復元の可能性を見いだす。本研究では、言語学のアプローチの中でも認知意味論的分析を用い、ユカタン・マヤの戦争に関する諸概念のうち、「戦勝」に新たな光を当てる^(註2)。当時のマヤ人の勝利に対する考え方の理解、彼らの一般的な戦争観やマヤ社会における戦争の位置付けを理解する糸口ともなるであろう。

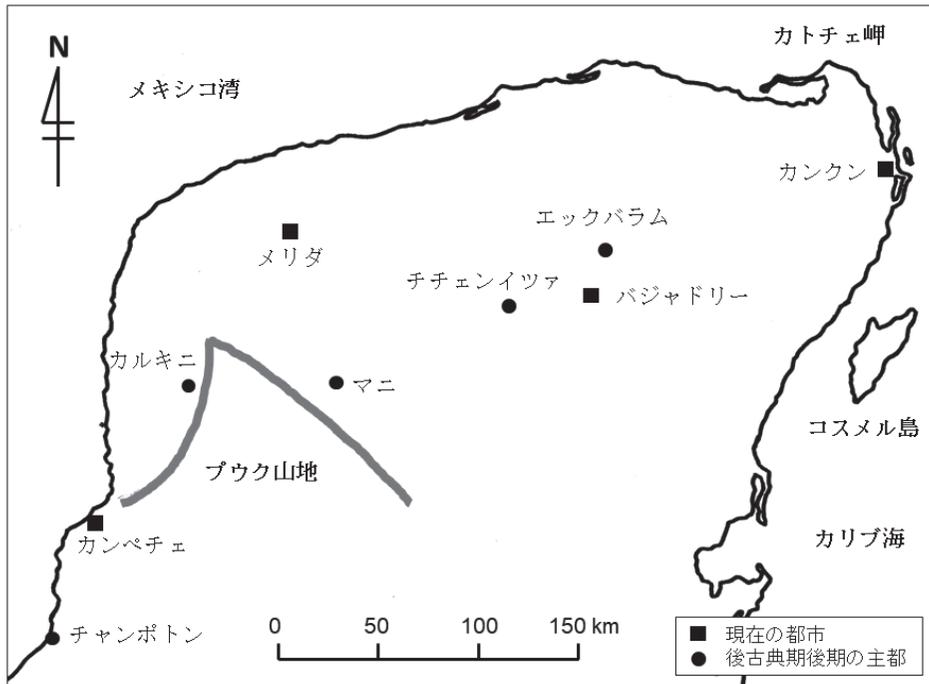


図1 ユカタン半島北部

1-2. 史料

本研究では、植民地期文書に属するスペイン語—ユカタン・マヤ語の語彙集 (vocabularios) を主に利用する。「辞典 (diccionarios)」とも呼ばれる。植民地期初期から中期にかけてフランシスコ会の宣教師たちが先住民へ彼らの言語でカトリックを布教するための道具として編纂したものである。『モトゥル辞典 (Calepino de Motul)』 (以下 *CM* と略記)、『マヤ・タン語彙集 (Bocabulario de Maya Than)』 (以下 *BMT* と略記)、『サンフランシスコ辞典 (Diccionario de San Francisco)』 (以下 *DSF* と略記) に加え、ベルトラン・デ・サンタ・ロサ・マリア (Beltrán de Santa Rosa María) の『マヤ語文法書 (Arte del idioma maya)』 (以下 *AIM* と略記) ^(註3) の計4冊の主要語彙集がある。さらに、19世紀に出版されたペレス (Pérez) の『マヤ語辞典 (Diccionario de la lengua maya)』 (以下 *DLM* と略記) も分析に使用することができる ^(註4)。

語彙集の性質について、植民地期の語彙集編纂には二つの大きな目的があった。一つはスペイン征服地に赴任したカトリック宣教師たちが布教目的で先住民の母語を学ぶためであり、もう一つは先住民の生活および宗教的態度をカトリックの礼節に則ったものに根本から変えるのに必要な先住民母語の語彙を整えるためであった。ハンクス (Hanks) によれば、ユカタン半島に派遣されたフランシスコ会宣教師たちは、マヤ語に存在しなかったカトリックの教義、祈り、説教、秘蹟に関する用語を先住民に教えることで、彼らの言語自体をマヤ人信徒共同体での宗教的実践に適したものに変換するという意図を持っていた [Hanks 2010:1-8]。スペイン人宣教師たちはラテン語やスペイン語の語彙や文法を参照してマヤ語を体系的に理解し、その上で既存のマヤ語の言

葉を組み合わせた、新たな意味を持たせるなどして新語も考案した [ibid.:118-241]。このような経緯から、戦争用語に関しても彼らのイデオロギーが関与した可能性は想定できる。なぜなら聖書や教義の中で、軍事用語が例えば神の命令による他民族との戦争の場面や悪の力との戦い等の描写に使用されているからである。そのため本稿では、1-3 で後述するように形態素レベルでの言葉の意味分析を採用し、マヤ人固有の概念か、あるいは西洋概念が関与した語なのかを判断する。

また、補足史料として語彙集以外の植民地期文献も活用する。年代記作者のロペス・コゴジュード [López Cogolludo 1996]、フェルナンデス・デ・オビエド・イ・バルデス [Fernández de Oviedo y Valdés 1944]、ヌエバ・エスパーニャ (Nueva España) 征服の主要軍事作戦に参加したコンキスタドールのディアス・デル・カスティージョ [Díaz del Castillo 2011] に加え、著名なフランシスコ会司教ランダ [Landa 1994]、そしてエンコメンデーロたちが植民地時代初期にスペイン王室に提出した報告書をまとめた『ユカタン歴史地理報告書 (Relaciones histórico-geográficas de la gobernación de Yucatán)』 (以下 *RHGGY* と略記) 等である^(註5)。年代記にはコンキスタドールズの証言、手記や報告書の内容をもとにユカタン・マヤ人との各地での戦闘が詳細に描写されている。しかしながら、スペイン人読者向けにスペイン人の視点で描かれているため、侵略された先住民の立場からの視点が欠如している。ランダの『ユカタン事物記 (Relación de las cosas de Yucatán)』や *RHGGY* からは、武器や征服時の戦闘のみならず、ユカタン・マヤ人が彼らに語った先スペイン期における先住民同士の戦争についての情報も得られる。しかし報告書という性格もあり、いずれも簡潔にまとめられた記述ばかりである。さらにスペイン語文献の場合、当時の記録者や情報提供者の戦争への関心の度合い、記録内容に対する責任感、実戦経験の有無等の要因により情報の正確性、豊富さ、緻密さが異なる。他方で『ヤシュククル年代記 (Crónica de Yaxkukul)』等のマヤ語文献にもわずかながら戦争に関する言及がある [Crónica de Yaxkukul:1926]。しかし、スペイン支配下で特権を享受し続けるため貴族たちが地元での権力の正統性を内外に誇示する意図で作成されたり、土地境界裁判での証拠提出のために 16 世紀の文書を断片的に集め編纂される等、歴史の一部歪曲や削除が見受けられる [大越 2005:90-92]。そのため同時代に作成された他の文書と照合し、歪曲・削除された理由を批判的に解釈する必要がある。

1-3. 方法論

本稿では、言語学的方法論である認知意味論的分析を利用し、言葉の意味から後古典期後期のユカタン・マヤ人の戦争に関する概念を分析する。マヤ語の認知意味論的分析の先例にはルス [Ruz 1992 [1985]] が挙げられる。チアパス州ツェルタル・マヤ語 (*tzeltal*) の植民地期語彙集を活用し、年代記等に記録されなかった先スペイン期から植民地期初期にかけての地域の日常、風俗習慣、概念を再現し同方法論の有効性を実証した。一方ユカタン・マヤ語の 16 世紀領域概念については大越 [Okoshi Harada 2006] が、植民地期初期におけるカトリック概念のマヤ語への浸透プロセスについてはハンクス [Hanks 2010] がそれぞれ成果を挙げている。

認知意味論的分析のうち、最重要プロセスである多義語分析を用いる。一つの単語や形態素が持つ複数の意味の中から、母語話者がその語から連想する最も典型的で基本的な意味を取り出す [松本 2003:135-143]^(註6)。形態素を丁寧に整理、解釈することで、マヤ人がその語から連想したであろう概念を再構築する。そして、その概念がマヤ人社会における他の概念といかに関連していたかを考察する。

言葉の意味合いは絶えず変遷するため、16~18 世紀に記録された語が必ずしも先スペイン期と同じ使われ方をしていたとは限らないのは無論である。先スペイン期の史料となると考古学データが中心となるが、スペイン征服以前の彼らの戦争概念を考古学史料から分析することは、現時点では困難とせざるを得ない。考古学的

アプローチによる戦争研究では、戦士や戦闘場面の図像、武器の遺物、防御遺構等の分析により目覚ましい成果が上がっている [Brokmann 2000, 青山 2015:157-168] もの、これらの史料から戦争・戦闘に関する思想的要素を再構築することは難しい。さらに石碑や土器に刻まれたマヤ文字を解読する碑文学の発展により、政体間の戦争の勝敗結果等に関しても理解が深まったが、その主題は王家の人物の個人的な歴史や功績である [Martin and Grube 2000]。文字や記述内容の解読が今後さらに進んだ上で、前述の多義語分析を碑文にも適用できる環境が整えば、碑文データからあらたな戦争概念が見つかる可能性がある。しかし、上記のような現状においては、本研究のようにスペイン征服前後に使用されていた単語の意味構造を把握することだけでも、彼らの世界観理解を準備する重要なステップとなるであろう。

単語の多義語分析は以下の手順で実施される：

1. 単語を形態素に分割する。
2. 各形態素を含む単語およびその用例を5冊の語彙集から可能な限り抜粋する。
3. 単語を構成する形態素の意味、その形態素を含む単語の意味、そしてそれらの例文、すべてを列挙する。
4. それらを共通する意味ごとにグループ分けする。
5. グループごとに具体的なレベルの意味と、抽象的なレベルの意味特徴、そしてそのグループが持つ概念領域を抽出する。
6. 分類された意味グループ同士を比較分析する。その中から最も基本的な意味を取り出す。
7. 意味グループ間に存在する相互関係を図式にして明示する。
8. 意味同士の相互関係、基本的な意味、具体的および抽象的レベルの意味特徴、概念領域を、ユカタン・マヤの社会的、文化的、地理的背景を踏まえ総合的に解釈し、ユカタン・マヤ語が持っていた「戦勝」の概念を復元する。

具体的レベルの意味とは、本稿においてはその語の字義通りの意味を指す。たとえば「頭を抱える」という語であれば、「困り果てる」という精神状態のことでなく単に「自分の頭部を抱え込む」動作のことである [松本 2003:85]。一方、抽象的レベルの意味特徴（共通の意味特徴）とは、複数の意味の間に存在する共通点、つまり規則性を、抽象的なレベルで表現した意味のことである。また概念領域（認知領域）とは、ある語の意味を特徴づけ理解する際に必要となる領域のことで、百科事典のカテゴリー分類に相当する [ibid.:65-67] ^(註7)。

意味同士の相互関係の把握は、意味の変化過程を理解するために有効である。もともと一つの意味のみ有していた単語から、長い年月かけ基本的な意味をずらして用いることで従来と異なる新たな意味が生まれることを意味の拡張、または意味変化と呼ぶ [ibid.:73-74]。本稿では、意味同士の相互関係を明らかにすることで意味拡張の経路を復元し、暫定的に指定した基本的意味を最終的に確定する ^(註8)。

さらに対象語の典型性、つまりより一般的な世界認識による単語の意味を理解するための補足データとして、現代ユカタン・マヤ人にインタビューを実施、同じ単語の意味や使われ方を調査する。インタビューによる意味の典型性調査は、認知意味論的分析の一部である [ibid.:30-49, 135-145]。400年近く経った今日でも植民地期語彙集に記載された意味の保存性が観察されれば、その語の意味が持つある程度の普遍性を確認できるため、この調査には一定の有効性がある。後古典期後期や植民地期初期のマヤ人への聞き取りが不可能である以上、現在に至るまでユカタン・マヤ語を母語とし、日常のコミュニケーションだけでなく自分たちの伝統文化、価値観、概念の次世代への伝達手段として積極的に使用し続けている人々がその対象となる。中でもユカタン州東部バジャドリ市 (Valladolid) 周辺地域は、人口におけるマヤ語話者率がユカタン州で最も高く (2000年メキシコ政府人口調査においてマヤ語単一話者率約28%、マヤ語・スペイン語話者率約72%)、スペイン語の語彙

を使わずにマヤ語の語彙のみを操る人々が尊敬される等、先スペイン期からの伝統文化、アイデンティティを大切にしている社会を維持している [Guzmán Medina 2013:57-71]。そこで本稿では、分析対象である 16 世紀に使われていた戦争関連の単語の現代における意味に関して、2020 年 2 月にユカタン州東部エックバラム (Ek Balam) 遺跡周辺の 3 村 (エックバラム (Ekbalam) 村、フヌク (Hunukú) 村、サンタ・リタ (Santa Rita) 村) で 40 代から 70 代の村人 10 名にインタビューを実施、全員から得た回答結果をデータとして用いている (註9)。

2. DZOY (ツオイ) : 痩せっぽちと戦勝

語彙集の「勝敗」に関する単語および用例には、「*dzoyzah* (ツオイサフ)」「*baczah* (バクサフ)」の 2 語とその派生語がある。本章では *dzoyzah* について議論し、続く第 3 章で *baczah* について分析する。

「戦争で勝利する」を表す *dzoyzah* (註10) という語は *BMT*、*AIM* および *DLM* に記載されている (註11)。この語は 2 つの形態素、*dzoy* と *-zah* から成る。このうち *dzoy* は語彙的な意味を持つ語根、内容形態素であり、*-zah* は語彙的な意味を持たない機能形態素である。

まず *-zah* についてだが、この形態素は相手に何かを強いる、または相手や自分に働きかけてある状態にする機能を持つ「強制接尾辞」である [*BMT*:36]。一方で自動詞を他動詞に変える働きをし、抗いがたい何か強い力を加えるというニュアンスも含む。つまり、*dzoyzah* の基本概念を理解するためには、個別的な内容を表す形態素 (内容形態素) である *dzoy* の意味分析が鍵となる。

2-1. 意味グループ① : 戦争で勝つ

まず、多義語分析の手順 4 の「共通する意味ごとにグループ分け」する作業から始める。*dzoyzah* または形態素 *dzoy* を含む語の意味の中から「戦争で勝つ」という意味を持つ単語群だけを一つのグループにまとめ、意味グループ①と名付ける：

2-1.1. *dzoyzah* : 「戦争で屈服させる (*rendir en la guerra*)」 [*BMT*:567] (註12)

2-1.2. *dzoyzah* : 「戦勝、勝利 (*victoria y vencimiento*)」 [*ibid.*:633]

尚、ユカタン・マヤ語では「負ける」を意味する特定の単語は存在せず、「勝つ」を表す語または形態素を使って以下のように「勝たれた」と受身形で表される。

2-1.3. *dzoyzabi* (ツオイサビ) 「戦争で屈服した (*fue rendido así [en la guerra]*)」 [*ibid.*:567] [文字通りの意味は「戦争で勝たれた」] (註13)

また以下に示す *dzoyzah* から派生した単語も同じ意味を共有する：

2-1.4. *ah dzoyzah* (アフ・ツオイサフ) : 「勝者 (*victorioso*)」 [*ibid.*:633] (註14)

2-1.5. *dzoyzah katun* (ツオイサフ・カトゥン) : 「勝利する (*ganar victoria*)」 [*AIM*:184, *DLM*:435] (註15)

2-1.6. *dzoyzahil* (ツオイサヒル) : 「戦勝 (*victoria*)」 [*AIM*:318]、 「戦勝、屈服 (*victoria, rendición*)」 [*DLM*:435] (註16)

次に、形態素 *dzoy* を含む単語をすべて抜粋し、意味グループ①「戦争で勝つ」を含め全部で 5 つの意味グループに分類する：意味グループ②「痩せっぽち」、意味グループ③「屈服させる (痩せっぽちにする)」、意味グループ④「打ち負かされる (痩せっぽちの心になる)」、意味グループ⑤「反論・説得する (言葉で痩せっぽちにする)」。続けて各グループの具体的なレベルの意味、抽象的レベルの意味特徴、そして概念領域を順を追って分析していく。

2-2. 意味グループ② *dzoy* : 痩せっぽち

筆者がまず注目したのは、スペイン語で「痩せっぽち」を意味する形容詞 *flaco* および「痩せ細る」を意味する動詞 *enflaquecerse* を使った説明で、これらを意味グループ②に分類する^(註17)。

- 2-2.1. *dzoy* (ツオイ) 「痩せっぽちの (*flaco*)」 [DSF:468]
- 2-2.2. *dzoyaan* (ツオヤアン) 「痩せ衰えた、ぐったりした (*enflaquecido, vencido*)」 [DLM:435]
- 2-2.3. *dzoyantal* (ツオヤンタル) 「痩せ細る (*ponerse flaco*)」 [*loc. cit.*]
- 2-2.4. *dzoychahal* (ツオイチャハル) 「痩せ細る (*enflaquecerse*)」 [*loc. cit.*]^(註18)
- 2-2.5. *dzoyan tu chhapahal* (ツオヤン・トゥ・チャハル) 「痩せ細った、力なく動き回ることができない (*flaco, sin fuerzas, que no se puede menear*)」 [BMT:351]^(註19)
- 2-2.6. *dzoy ach* (ツオヤチ) 「弱々しい人、体力がなくなすぐに疲れる (*flojo, para poco, que luego se cansa*)」 [*ibid.*:353] 「虚弱な人、ほとんど労働できない (*delicado, para poco trabajo*)」 [*ibid.*:245]

例 2-2.1 や 2-2.2 のように、ユカタン・マヤ語の *dzoy* または *dzoyaan*^(註20) は、単体で使われると「太った」の反義語である「痩せ細った、痩せっぽちの」という意味を表した。現代ユカタン・マヤ語でも全く同じ意味で日常会話で使われている^(註21)。実際に 2020 年にエックパラム遺跡周辺 3 村で実施したユカタン・マヤ人へのインタビューにおいて、*dzoy* または *dzoyaan* の意味について全員から「痩せっぽち *flaco*」の回答を得た。

例 2-2.3 の接尾辞 *-tal* はスペイン語でいう再帰代名詞の役割を果たし「～になる」という意味になる。また、例 2-2.4 の接尾辞 *-chahal* は他動詞を自動詞化する [BMT:33]。この *-chahal* を伴うことで「自身が痩せ細る」という意味になる。そして例 2-2.5 の *tu* は、スペイン語の 3 人称所有代名詞 *su* 「彼 (彼女) の」または *en su* 「彼 (彼女) の～に (で)」に相当し [DLM:336]、*chhapahal* は「病気 (*enfermedad*)」 [CM:258] を意味する。つまり、全体を直訳すると「彼 (彼女) の病気で痩せ細った」となるが、この状態を「自力で動けないほど弱った」と別の言い方で表している。例 2-2.6 の接尾辞 *-ach* は、ある語を名詞化する機能を持つ [Barrera Vásquez 1980:2]。痩せ細って体力がなく、肉体労働にはほとんど役に立たない人を意味する。

以上のように、*dzoy* は単に「細身」であることを示す語ではなく、ネガティブなイメージを含む。当然「かっこいい、美しい」などの肯定的なニュアンスはなく、むしろ不健康に痩せた状態による体力不足を強調した表現であることが理解できる。このことは、ユカタン・マヤ語で「痩せた、細い」を表す類義語 *bekech* (ベケッチ) と意味を比較すると一層はつきりする。*bekech* は「棒や糸などのように細いもの (*cosa delgada como palo, hilo, etc.*)」 [CM:82]、「糸や棒のように細い、肉がほとんどなく痩せた (*delgado como hilo o palo, delicado, de poca carne*)」 [DSF:27]、または *bekechcuntah* (ベケッチクンタフ) で「細くする、何かの厚さを減らす (*adelgazar, rebajar el grosor de algo*)」 [DLM:23] というように単に物理的に細い形状であることを表し、外見にのみ関心がある^(註22)。要するに、ツオイにはベケッチと違い「体力低下状態」という健康に関する意味が付加されているのである。

したがって、この語の概念を日本語で表す場合、虚弱ゆえに食が細い、または何らかの理由で十分な食事がとれず、そのため体力がなく疲れやすく体調を崩しやすい、そしてその結果貧弱な体格であるという意味を表す「痩せっぽち」という言葉が適切だと考えられる。この言葉には、一般的に「不健康な痩せ型」という言外の意味も込められている。

要するに意味グループ②に共通する具体的なレベルの意味は「<痩せっぽち>」であり、同時にこれを抽象的なレベルの意味に言い換えると、「<痩せ細っているため体力がない状態>」という特徴を抽出することができる。そ

してこのグループの概念領域は「体型領域」である。概念領域（認知領域）にはさまざまなレベル、種類のものがある [松本 2003:66-67] ため、実際には意味グループ②には「体力領域」も含まれる。しかし、この領域は後に紹介する他の意味グループにも共通するため、ここでは省略する。以降、他の意味グループに関しても同様とする。

2-3. 意味グループ③ *dzoyzah* : 屈服させる

次の意味グループは「戦争に勝つ」を表す意味グループ①と同じく接尾辞 *-zah* を伴う。しかし、語彙集の説明によると戦争関連の使い方限定されていないため、グループ①とは別の意味グループとして分類する。

- 2-3.1. 「相手を打ち負かす、屈服させる、衰弱させる、疲れさせる、気力を失わせる (*vencer, rendir, desfallecer, cansar a otro y desmayarle*)」 [CM:220] ^(註23)
- 2-3.2. 「相手を疲れさせる、気力を失わせる、衰弱させる、打ち負かすまたは屈服させる (*cansar a otro y desmayarlo, desfallecer, vencer o rendir*)」 [BMT:168]
- 2-3.3. 「相手を打ち負かす、屈服させる、気力を失わせる、衰弱させる (*vencerlo, rendirlo, desmayarlo, desfallecerlo*)」 [AIM:184] 「打ち負かす、屈服させる、相手を衰弱または相手の気力を失わせる (*vencer, rendir, hacer que otro desfallezca o desmaye*)」 [DLM:435]
- 2-3.4. 「打ち負かす、怖気づかせる、屈服させる (*vencer, acobardar, rendir*)」 [DSF:468, 721]

上記の例は、いずれも「戦争での」勝利に特定された説明ではない。このことから、戦争に限らずけんかや力比べなどの日常の場面でも *dzoyzah* が用いられていたと推測できる。

例 2-3.1 と 2-3.2 の説明の中の「疲れさせる (*cansar*)」は体力の消耗を意味する一方で、例 2-3.1、2-3.2、2-3.3 の「衰弱させる (*desmayar*)」は気力を奪うという意味を持つ ^(註24)。そのため全体で <相手の体力気力両方またはいずれかを弱らせる> という表現に言い換えることができる。先程の意味グループ②の抽象レベルの意味特徴 <痩せ細っているため体力がない状態> と比較してみよう。グループ②では体型と体力低下のみを表した。しかし今回のグループ③では、相手の体型には触れていない一方で、体力だけでなく気力の低下も表している。一般的に、瘦弱な状態が慢性的に続くことと無気力で非意欲的な精神状態になることとはある程度関連性がみられる。このことから *dzoy* の意味が拡張され、相手を体力・気力とも痩せ衰えた人間と同じレベルにさせる行為を表すようになったと考えることができる。

その一方で、例 2-3.1 から 2-3.4 すべてに共通する「打ち負かす (*vencer*)」「屈服させる (*rendir*)」という説明からは、相手を自分に反抗できない状態に置くことが行為の目的であったことが明らかとなる。以上のことから、グループ③の抽象的レベルの意味特徴は <何らかの方法を用いて、相手が自分に反抗できないように、相手の体力または気力を失わせる> となる。

次に具体的レベルの意味についてだが、グループ② *dzoy* の具体的レベルの意味 <痩せっぽち> をもとに考えると、強制接尾辞 *-zah* を伴うことから <相手を (力づくで) 痩せっぽちにする> という意味が抽出できる。これは先程の抽象レベルの意味を、ユカタン・マヤ人が直感的に理解しやすい言葉で表現していたと考えることができる。けんかや力比べが長時間続けば双方とも疲労し、集中力も切れてくる。ユカタン半島北部という蒸し暑い土地での運動となれば疲労の度合いはさらに大きくなる。彼らはこの厳しい自然環境下での競い合いで疲弊した敗者の姿を、身近な存在である「痩せっぽち」のイメージと重ね合わせたのであろう。

意味グループ③の概念領域について、意味説明がいずれも簡潔であるため定義は困難である。しかし、例 2-3.1 から 2-3.4 の内容を総合的に判断して「勝負領域」とする。

2-4. 意味グループ④ *dzoyol* : 打ち負かされる

形態素 *dzoy* に形態素 *ol* (オル) を組み合わせた単語 *dzoyol* (ツォヨル) とこれに関連したものを意味グループ④に分類する。

2-4.1. *dzoyol, dzoyol ol* (ツォヨル, ツォヨロル) 「屈服する、打ち負かされる (*rendirse, vencerse*)」 [DSF:721]

2-4.2. *dzoyol* (ツォヨル) 「打ち負かされる、気力が失せる (*vencerse, desmayarse*)」 [ibid.:761]、「怖気づく、打ち負かされる、屈服する (*acobardarse, vencerse, rendirse*)」 [ibid.:468]、「怖気づく、屈服する (*acobardarse, rendirse*)」 [AIM:172]

2-4.3. *dzooyol* (ツォオヨル) 「打ち負かされた、怖気づく (*ser vencido yacobardarse*)」 [CM:220]

2-4.4. *dzoyol ol, dzoyzah ol* (ツォヨロル, ツォイサホル) 「衰弱する (*debilitarse*)」 [BMT:241]

2-4.5. *dzoyan ol* (ツォヤノル) 「心服した (*rendido en el ánimo*)」 [ibid.:567]

形態素 *ol* または *ool* は、「心 (*corazón formal y no el material*)」 [CM:595] 「意志、欲求 (*voluntad y gana*)」 [ibid.:596] 「意図 (*intento o intención*)」 [loc. cit.] を意味する。このことから *dzoyol* とその派生語は、心の動きに関連した表現であることが推測できる。例 2-4.2 の「気力が失せる (*desmayarse*)」や 2-4.2、2-4.3 の「怖気づく (*acobardarse*)」から、この語が精神状態に言及していたことが理解できる。例 2-4.4 の「衰弱する (*debilitarse*)」というスペイン語の動詞は、18 世紀前半にスペイン王立アカデミーより出版された『模範辞典 (*Diccionario de Autoridades*)』(以下 *DA* と略記)によると「憔悴させる、瘦せさせる、何かを低下させる (*extenuar, enflaquecer, disminuir alguna cosa*” [DAIII])」というように、精神や肉体以外にもあらゆる事物の衰えを表すのに使用された。しかし、心に関連する形態素 *ol* がついているため、上記用例の説明においては精神の衰弱に限定した使い方をされていたことがわかる。

次に語の構造に注目すると、意味グループ①や③の *dzoyzah* と異なり、相手や自分に働きかけてある状態にする、または自動詞を他動詞に変える強制接尾辞 *-zah* を伴っていないことから、作用が他に及ばない自動詞であることがわかる。このことから、*dzoyol* は何らかの理由で自分自身の気力がくじけることを表した。ちなみに例 2-4.4 では *-zah* がついているが、これは自分の気力を衰弱させる原因が抗いがたい何か強い力であることをあえて強調した表現だった可能性もある。

以上のことから、意味グループ④では<何らかの理由によって、気力が失われ逆らえなくなる>という抽象的レベルの意味特徴を抽出することができる。ここでは主語の体力については言及していない。一方具体的レベルの意味は、グループ② *dzoy* の意味<瘦せっぽち>に *ol*<心>がついた自動詞であることから<瘦せっぽちの心になる>となる。つまり、ここでも屈服や敗北を、瘦せっぽちの無気力で非意欲的な精神状態と関連付けているのである。そして、このグループの概念領域は「精神領域」となる。

2-5. 意味グループ⑤ *dzoyzah than* : 反論して説得する

次のグループは、意味グループ④の *ol* のケースと同様に、形態素 *dzoy* と別の内容形態素との組み合わせで成立した単語である。ただし全語彙集の中でわずか二例しか見つからなかった(うち一つは『マヤ語文法書』を引用したもの)ため、使用頻度は極めて低かったであろう。

2-5.1. *dzoyzah than* (ツォイサフ・タン) 「反論する (*argüirlo*)」 [AIM:184]、「反論して説得する (*argüir, convencer argumentando*)」 [DLM:435] (註25)

この動詞も強制接尾辞 *-zah* がついているので他動詞である。語尾の名詞 *than* は「言葉、話 (*palabra y plática*)」

「言語 (lengua o lenguaje que hablamos)」 [CM:734] を意味し、動詞の手段を表している。つまり「動詞プラス *than*」で「言葉を使って～する」となる。

この *dzoyzah than* は用例が一つのみであるため、抽象的レベルの意味特徴を導き出す条件が整っていない。しかしあえて特定を試みれば、意味グループ③*dzoyzah* の<相手が自分に逆らえないように、相手の体力または気力を失わせる>を参考にして導き出すことは可能である。これに *than* (言葉を使って) を加えることで、<相手が逆らえないように、言葉を使って、相手の気力を失わせる>となる。単に反論するだけでなく、最終的に相手の気力をくじき、降参させることが目的だったことが窺える。

一方具体的レベルの意味は、形態素 *dzoy* の<痩せっぽち>という意味をもとにすると<言葉で痩せっぽちにする>となる。相手を舌鋒鋭く攻撃し、羸瘦 (るいそう) 者のように無気力で無抵抗な状態にすることを表している。概念領域は「論争領域」となる。

2-6. DZOYの基本的意味

以上に示された多義語 *dzoy* の複数の意味間の関連性を明示するために、全意味グループの中から *dzoy* の基本的意味を認定し、それ以外との位置づけを行う。第一段階として、戦争領域 (意味グループ①) 以外の意味グループ②から⑤の具体的および抽象的レベルの意味特徴を以下に整理する (表1)。

	意味グループ	語彙集での意味	具体的レベルの意味	抽象的レベル の意味	概念領域
1	意味グループ② <i>dzoy</i>	痩せっぽちの 痩せ細った	痩せっぽち	痩せ細っているため体力 がない状態	体型
2	意味グループ③ <i>dzoyzah</i>	屈服させる 打ち負かす 衰弱させる	痩せっぽちにする	逆らえないように相手の 体力や気力を失わせる	勝負
3	意味グループ④ <i>dzoyal</i>	打ち負かされる 屈服する 気力が失せる 怖気づく	痩せっぽちの心になる	気力が失われ逆らえなく なる	精神
4	意味グループ⑤ <i>dzoyzah than</i>	反論して説得する	言葉で痩せっぽちにする	逆らえないように言葉で 相手の気力を失わせる	論争

表1 *DZOY*の意味グループ②～⑤の各意味

多義語の基本的意味を認定する基準の一つに「用法上の制約がない、あるいは相対的に少ない意味」という定義がある [松本 2003:141-145]。用法上の制約がない (少ない) 意味とは、修飾要素を必要とせず比較的自由に使える度合いが高いということである。上記②から⑤を比較すると、②の<痩せっぽち>という体型領域での意味は、*dzoy* 単体あるいは語尾変化形それ自体で意味が成り立つことから、制約がない、または少ないと言える。例 2-2. 2 のように語尾に *-an* をつけ受身形となった場合でも、「痩せた」という意味以外は持たない。一方で、他の意味グループにはいずれも用法上の制約がある。例えばグループ③の場合、<痩せっぽちにする>という意味は、接尾辞 *zah* を伴って他動詞となった場合にのみ成立する。グループ④の場合は、心や

意志を表す語 *ol* が伴うことで精神状態を表す意味に限定されるという制約がある。そしてグループ⑤も、接尾辞 *-zah* と補助語 *than* (言葉) を必要とし、論争の場面でしか使うことができない。

もう一つの基本的意味の判断基準として、話者が最も把握しやすい対象であることが挙げられる。人間は五感で直接把握しにくい対象を、日常の中でより把握しやすい対象を通して理解する傾向がある [ibid.:145] (註26)。

「痩せっぽち」という体型的特徴を示す表現は、当時のマヤ社会の全構成員が把握しやすかった。先スペイン期(植民地期も同様であったが) マヤ社会では、干ばつやハリケーンなどさまざまな要因で主食であるトウモロコシの不作が起こり、しばしば飢餓に見舞われた [RHGGY:71, *Libro de Chilam Balam de Chumayel*:106]。したがって、村や道中で痩せこけた人物を見かける機会が多かったことは容易に想像できる。

グループ②から⑤には、<体力と気力のいずれかまたは両方を失う>という概念が共通している。自分または相手の状態が、平常から体力低下や無気力、無抵抗という非常へ移行することを表している。つまり彼らマヤ人は、体力と気力がない状態の象徴的存在であった痩せっぽちのイメージから想像力を膨らませ、相手や自分自身を「象徴的に」痩せ衰えさせる、つまり痩せの人物と同じように気力体力を失った状態にする行為をも指すようになったと考えられる。以上のことから、意味グループ②を基本的意味と認定する。

認知意味論的には、ユカタン・マヤ人はグループ②の具体的レベルの意味<痩せっぽち>と抽象的レベルの意味特徴<痩せ細っているため体力も気力もない状態>を参照点にして、直感的に把握しにくい「勝負」「精神」「論争」という領域へ、互いの意味の隣接性や概念の関連性を利用して拡張させたと言える (註27)。たとえば、グループ③の「屈服させる、打ち負かす、衰弱させる」という意味は、「痩せっぽちな人間」から連想される「体力と気力を失った状態」からイメージを膨らませ、意味を拡張させて誕生したと考えることができる。グループ④の「気力が失せる、怖気づく」は、「痩せっぽちな人間」の精神状態との関連性から拡張が起こったと言える。グループ⑤の「反論して説得する」も同様である。

したがって、意味グループ②～⑤の相互関係を図示すると次のようになる (図2)。

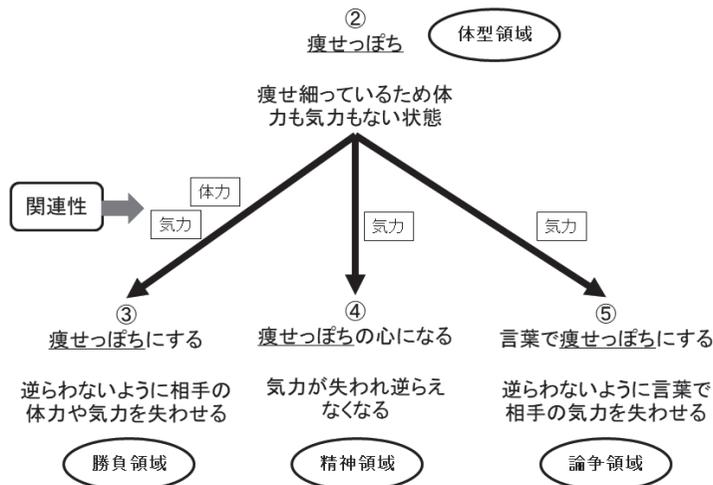


図2 DZDYの意味グループ②～⑤の相互関係図

2-7. *DZOYZAH* が表す戦勝の意味

以上の分析結果をもとに、意味グループ①*dzoyzah*の具体的レベルの意味と抽象的レベルの意味特徴を復元する。概念領域についてだが、「戦争で勝つ」という表現からこのグループは当然「戦争領域」に属する。そして単語の構造としては、形態素 *dzoy* に強制接尾辞 *-zah* が伴うという用法上の制約があることから、意味グループ①も他のグループ同様に基本的意味から派生したことがわかる。

次に抽象的レベルの意味特徴の抽出だが、分析の手掛かりとしてグループ①と同じ形態素の組み合わせパターンであるグループ③*dzoyzah*の抽象的レベルの意味を利用することができる。勝負領域に属するグループ③の意味は、戦争領域より日常生活での使用頻度が高かったと考えられるため、グループ③の意味から「戦勝」の意味が派生したと仮定して分析を進めることが可能だからである。この仮定は、意味グループ①の例 2-1.5、*dzoyzah katun* からも導き出すことができる。通常競い合いの意味で使われていた *dzoyzah* に「戦争」を意味する名詞 *katun* を加えることで、「戦争で屈服させる」と戦争での勝利という意味を時には強調する必要があったと考えられるからである。

グループ③の意味特徴<何らかの方法を用いて、相手が自分に逆らえないように、相手の体力や気力を失わせる>を、グループ①の例 2-1.1 「戦争で屈服させる (*rendir en la guerra*) 」という語彙集の説明に当て嵌めることで、敵を心身ともに衰弱させて自分の影響下に置く、という行為自体が戦場での勝利と認識されていたと解釈することができる。さらに、両グループともに強制接尾辞 *-zah* が付随することから、相手の体力と気力を「力づくで」奪うという概念も共通していたことがわかる。一方、グループ③では特定されていなかった「奪う」ための手段についてだが、戦争領域へと意味が拡張された時点で自然と「軍勢力」に限定されている。したがって、意味グループ①の抽象的レベルの意味特徴は<軍勢力を用いて、相手が自分に逆らえないように、相手の体力や気力を失わせる>となる。

続けてグループ③の具体的レベルの意味<痩せっぽちにする>を手掛かりに戦勝の意味について分析する。そのためには、まずユカタン半島での戦闘風景を思い浮かべる必要がある。彼らの戦闘は集団同士のにらみ合いから始まった。矢石や投槍が飛び交い怒号と騒音が鳴り響く中、戦士たちは互いに接近し、やがて対一の武器を用いた格闘に突入した [Díaz del Castillo 2011:5-10, *RHGGYI*:271, Fernández de Oviedo y Valdés 1944 III:268-272]。戦士たちはチャートを使用した短槍や諸刃の木剣で敵を傷つけ体力を消耗させ、抵抗する気力を失った相手を捕獲した (3章で詳述する) (註28)。

この格闘の場面を、<痩せっぽちにする>という表現から解釈すると、少なくとも敵を殺戮することに最大の関心があったわけではないことが読み取れる。「戦場で相手を痩せっぽちにする」という表現は、年中蒸し暑いユカタン半島の密林や草原において、武器を振り回し駆けまわって戦った結果精根尽き果てた敗者の状態を的確に描写している。たとえ負傷して体力が奪われていても意気軒高の敵は抵抗し続けたであろう。だからこそ、敵の体力だけでなく気力も同時に奪い、自らの抵抗が不毛であると実感させることで敵に強烈な恐怖を与え、痩せの人間が日常的に見せる無気力で無抵抗、つまり反撃不能な状態に陥れることで、初めて「戦争に勝利した」と断言できたのであろう。一方、*dzoyzah* という語への西洋概念の関与についてだが、彼ら先住民の日常と実戦に密接に関係してきたこの語にフランシスコ会宣教師のイデオロギーが関与した可能性は低いと言える。

したがって意味グループ①の具体的レベルの意味は、<(戦いで) 痩せっぽちにする>のように、グループ③の具体的意味に「軍勢力を用いて」という言外の意味が含まれていたものと考えられる。

最後に戦争概念領域を含めた意味グループすべての相互関係を図示すると次のようになる (図3)。

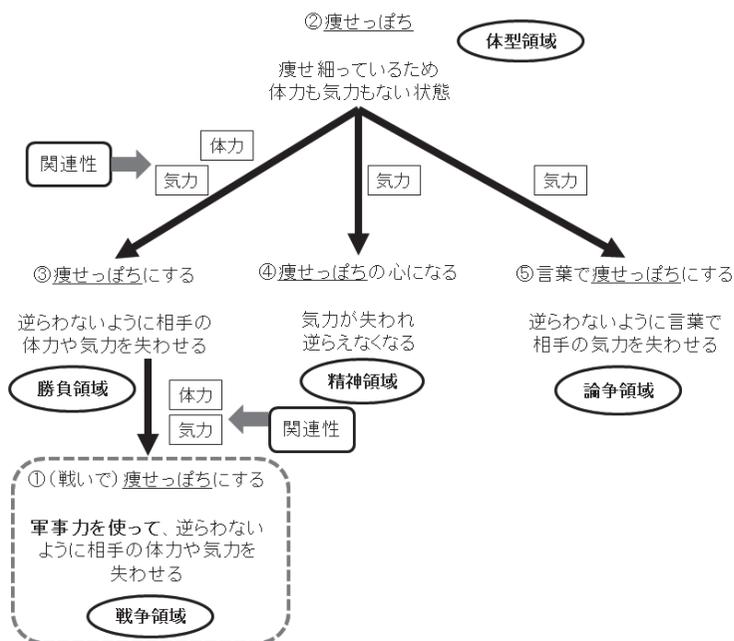


図3 DZOYの全意味グループの相互関係図

3. BAC (バク) : 骨と戦勝

続いて *baczah* (バクサフ) についてであるが、この語は *CM*、*BMT*、*DSF* 等主要語彙集で頻繁に記述がみられることから当時一般的な用語だったと想定される。*baczah* は、*dzoyzah* と同じく 2つの形態素 *bac* と *-zah* で構成される。接尾辞 *-zah* は前述のように相手に何かを強いる、またはある状態にする機能を持つ強制接尾辞である。したがって *baczah* の正確な意味を理解するには内容形態素 *bac* の概念を把握する必要がある。

3-1. 意味グループ① *baczah* : 戦争で屈服させる、捕虜にする

各語彙集に記載されている *baczah* の説明は以下のとおりである：

- 3-1.1. 「戦争で屈服させる (*rendir en la guerra*)」 [*BMT*:567]
- 3-1.2. 「戦争で捕虜にする、または屈服させる、戦争で[人を]略奪する。捕虜または屈服した人 (*cautivar o rendir en guerra o despojar así, y el cautivo o rendido*)」 [*CM*:64] (註29)
- 3-1.3. 「戦争で捕虜にする (*cautivar en guerra*)」 [*BMT*:177]、「戦争捕虜 (*cautivo así en guerra*)」 [*loc. cit.*]、「戦士の獲物、戦利品 (*presa o despojo de la gente de guerra*)」 [*BMT*:537]
- 3-1.4. 「戦争捕虜または戦争で捕虜にする。戦争での敗者、捕虜、奴隷。敵の戦利品 (*cautivo y cautivar en guerra, vencido, cautivo o esclavo habido en guerra, despojo de los enemigos*)」 [*DSF*:16, 534]、「戦争で勝つ、または捕虜にする (*vencer o captivar en guerra*)」 [*ibid.*:761]、「敗者、捕虜 (*vencido, cautivo*)」 [*loc. cit.*]

- 3-1.5. 「古い用法：戦争で勝つ、捕虜にする (antic. vencer, cautivar en guerra)」 [DLM:16] ^(註30)、「戦争での敗者 (el vencido en guerra)」 [loc. cit.]、「捕虜にする、征服する (cautivar, conquistar)」 [loc. cit.]

この *baczah* という語は動詞、名詞いずれとしても使うことができ、*dzoyzah* 同様「戦争で屈服させる、負かす (vencer, rendir)」という意味を持つ。しかし同時に「戦争で捕虜にする」ことも表すため、「屈服させる」行為と「捕虜にする」行為が当時のユカタン・マヤ語では同義として扱われていたことが推測される。

興味深いのは、例3-1.5にある「古い用法」という注意書きである。つまり *DLM* の編者ペレスが植民地期の語彙集をもとに自身の辞典を編纂していた19世紀には、*baczah* の「戦争で勝つ、捕虜にする」という意味での使用は廃れつつあったということである。ユカタン半島におけるスペイン植民地行政確立以降300年近く経った19世紀初頭には、先住民社会はごく僅かな反乱を除き戦争(武力紛争)と無縁の生活を送っていた^(註31)。当然、戦争捕虜を取る社会習慣も遠い過去のものとなっていたために、この語の使用頻度も低下したと考えられる。実際2020年に実施されたインタビューにおいても、回答者の誰も *baczah* という語の存在自体を知らなかった。

この語は意味グループ①の「戦争で屈服させる・捕虜にする」を含め計4グループに分類することができた：意味グループ②「骨」、意味グループ③「痩せ細った生き物」、意味グループ④「幼児」。

3-2. 意味グループ② *bac* : 骨

bac 単体での意味を調べると、すべての語彙集に共通しているのは「骨」に関連した説明である^(註32)。

- 3-2.1. *bac* (バク) 「骨 (hueso)」 [CM:64, DSF:15, AIM:274, DLM:16]、「動物の骨 (hueso de animal)」 [BMT:625]
- 3-2.2. *bac* 「骨のように硬くて頑丈な (fuerte y recio como el hueso)」 [ibid.:358]
- 3-2.3. *bac* 「らっぱ、牛の角 (bocina, o cuerno de vaca)」 [CM:64]、「先住民が蜂の巣から採蜜するのに使うシカの角 (cuerno de ciervo con que los indios castran las colmenas)」 [loc. cit.]
- 3-2.4. *hom bac* (ホム・バク) 「骨製のらっぱ (bocina de hueso)」 [BMT:153]、「トランペット、らっぱ (trompeta, bocina)」 [DSF:147]

上記の例から解釈すると、*bac* の一般的意味は「人間または動物の骨」である。しかし、同じ骨質でできた「角(つの)」も示すようになり、さらに角や骨でできた「トランペット」も指すようになったと考えられる。一方で、例3-2.2の「硬い、頑丈な」を表す形容詞形は、骨の一般的特質から概念の関連性にもとづいて派生したことがわかる。また、通常 *bac* は骨格全体または細い骨のことを指し、「頭蓋骨」には *tek* (ツェック) という別の語が充てられていた [CM:195, BMT:163, DSF:367, DLM:363]。以上のことから、意味グループ②の具体的レベルの意味は<骨>、そして抽象的レベルの意味特徴は<生物の身体の細くて硬い部分>であり、概念領域は「身体組織領域」である。

3-3. 意味グループ③ *ah bac* : 痩せ細った生き物

意味グループ③は、「骨」と意味の関連性が高いが別の意味を持つ語の集まりである。

- 3-3.1. *ah bac* (アフ・バク) 「骨が浮き出るほど痩せつぼちの動物 (animal muy flaco en los huesos)」 [CM:8]
- 3-3.2. *ah bacuinic* (アフ・バク・ウイニク) 「骨が浮き出るほど痩せこけた人 (hombre así flaco)」 [loc. cit.]
- 3-3.3. *ah chaybac uinic* (アフ・チャイバク・ウイニク) 「骨が浮き出るほどにとても痩せこけた人 (muy flaco)

en los huesos) 」 [CM:22] (註33)

3-3.4. *ah bac tzimin* (アフ・バク・ツイミン) 「痩せ馬 (caballo flaco) 」 [ibid.:8] (註34)

3-3.5. *bac hal* (バク・ハル) 「痩せ細る (enflaquecerse) 」 [ibid.:65]

接頭辞 *ah* は行為者 (動物を含む) を表す [BMT:30]。例 3-3.2 の *uinic* は「男または女」を表す [CM:761]。字義通り訳せば「骨の人 (動物) 」である。また例 3-3.5 の *bac hal* についてだが、接尾辞 *hal* は名詞や形容詞に付き、再帰動詞「～になる」を形成する [ibid.:296]。そのため字義的な意味は「骨になる」である。いずれもユカタン・マヤ人が「骨」という言葉から「骨が浮き出るほどに痩せた」という体型的特徴を自然と連想し、<骨に隣接した身体の外表面>という「骨」との概念上の隣接性にもとづいて「ガリガリに痩せた」という意味への拡張が行われたことがわかる。

したがって意味グループ③の具体的レベルの意味は<骨の生き物>、抽象的レベルの意味特徴は<ガリガリに痩せた生き物>となり、概念領域は「体型領域」となる。ただ、*dzoyzah* の<痩せっぽち>の場合とは異なり、見た目にもみ関心があり、精神状態に関するニュアンスは含まれていない。

3-4. 意味グループ④*ah bac* : 幼児

次の意味グループは、前述の「ガリガリに痩せた人」からさらに意味が細分化、拡張された用法である。

3-4.1. *ah bac* 「幼児、小さい子。 *ix bac* 幼い女の子 (niño o muchacho pequeño. *Ix bac* niña) 」 [CM:8, 64]、
「幼児、小さい子供 (niño, muchachuelo) 」 [DSF:15]、
「幼児、乳児 (criatura, niño o niña [de pecho]) 」 [BMT:212]

3-4.2. *bac* 「古い用法 : 少年、若者 (antic. muchacho. joven) 」 [DLM:14]

前述のように、ユカタン半島北部低地では降雨が少ない年はたびたび飢饉に見舞われたことから、栄養失調で痩せ気味の乳幼児がよく見かけられたことは疑う余地はない。このため、肋骨が浮き出た子供のことをこのように呼んでいたのではないだろうか。ただし、今回もペレスが例 3-4.2 で「古い用法」と記しているように、19世紀にはすでにこの語は「幼児」の意味で使われなくなっている。19世紀初頭に半島外から大量に食糧が輸入されるようになり都市部の食糧事情は変化したものの、農村の先住民の間では相変わらずトウモロコシの不作による飢饉はなくならなかった [Mezeta Canul 2015:168-186]。そのため幼児や少年の栄養状態が改善された結果この意味での使用が廃れたかどうかは不明である。

以上のことから意味グループ④の具体的レベルの意味は<骨の子供>、抽象的な意味特徴に言い換えると<ガリガリに痩せた子供>となり、概念領域は③同様「体型領域」となる。

3-5. *BAC* の基本的意味

bac も *dzoy* 同様に多義語であり、複数の意味同士の関連性が確認されたが、*dzoy* ほどの意味の拡張は見られなかった。戦争領域 (意味グループ①) を除いた *baczah* の意味グループ②から④の具体的および抽象的レベルの意味特徴を整理すると以下ようになる (表2)。

	意味グループ	語彙集での意味	具体的レベルの意味	抽象的レベルの意味	概念領域
1	意味グループ② <i>bac</i>	骨	骨	生物の身体の細くて 硬い部分	身体組織
2	意味グループ③ <i>ah bac</i>	骨が浮き出るほど 痩せこけた人	骨の生物	ガリガリに痩せた 生き物	体型
3	意味グループ④ <i>ah bac</i>	幼児	骨の子供	ガリガリに痩せた 子供	体型

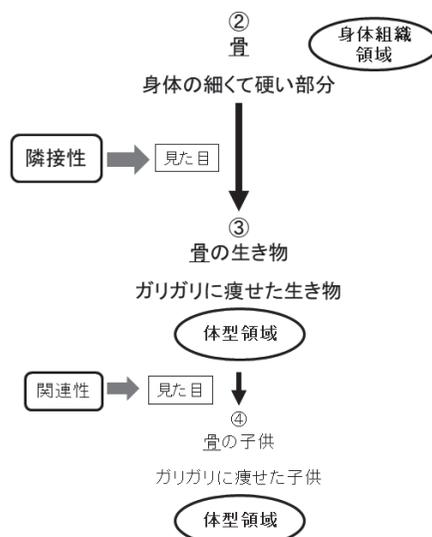
表2 *BAC*の意味グループ②～④の各意味

表からわかるように、多義語 *bac* の典型的な使い方は「骨」である。ユカタン・マヤ人にとって、骨とは埋葬や人身供犠、飢饉による死者等さまざまな場面で目にする身近な存在であった。そのため、彼らの頭に浮かびやすく具体的、直感的に理解しやすいものであった。このことは、基本的意味の判断基準である「話者が日常の中で最も把握しやすい対象」にも当て嵌まる。以上の理由から、具体的レベルでの基本的意味は「骨」と認定でき、その他の表現は骨との隣接性から派生したと考えられる^(註35)。

次に *bac* の意味グループ全体に共通する抽象的レベルの基本的意味について考察する。これまでの分析から、ユカタン・マヤ人は骨 *bac* という単語から骨と皮ばかりの痩せ型の姿も容易に連想できたことがわかる。したがって、「骨」を参照点にして概念の隣接性から拡張された「ガリガリに痩せた」という意味も、*bac* という語の基本的意味に取り込まれたと考えられる。

以上のことから、抽象的レベルにおける *bac* の基本的意味は、意味グループ②と③が融合した「骨だけに見えるほど痩せ細った状態」と認定できる。

意味グループ②～④の相互関係を図示すると次のようになる(図4)。

図4 *BAC*の意味グループ②～④の相互関係図

3-6. BACZAH が表す戦勝の意味

これまでの分析結果から *baczah* の意味グループ①での具体的なレベルでの意味を復元すると、「骨」を表す語 *bac* に「力づくで～させる」を表す強制接尾辞 *-zah* が伴うことで、「力づくで相手を骨（の状態）にする」となることがわかる。「骨の状態」とは、これまで見てきた通り、骨と皮ばかりに痩せ細った状態のことを彼らなりに具現化した表現である。

では「骨にする」を、我々が字義から想像するように「殺害する」と解釈することはできないのだろうか。語彙集でスペイン語の「殺す (*matar*)」や「死ぬ (*morir*)」「死 (*muerte*)」「死者 (*muerto, difunto*)」等に関連する単語について調査した結果、いずれにおいても骨を表す形態素を見つけ出すことはできなかった^(註36)。また、形態素 *bac* を伴う様々な単語からも、殺害や死に関する意味は見つからなかった。ユカタン・マヤ人の世界観の中で *bac* という単語と死との概念的結びつきが確認されず、痩せた体型との強い関連性のみが観察できたことは興味深い。このテーマに関しては今後の課題としたい。

抽象的レベルの意味特徴であるが、*bac* の基本的意味に *-zah* の「力づくで～させる」を加えてもく（力づくで）相手を骨だけに見えるほど痩せ細った状態にする」と定義するのが限界であり、分析は不十分である。しかし本稿 3-1 で述べた通り、語彙集の説明によると *baczah* という語が「戦争」の概念領域で使われていたことは明白である。このことから、*baczah* は軍事力を用いて相手を極度に痩せた状態にすることを意味したと解釈できる。さらに、語彙集のスペイン語訳に「屈服させる (*rendir*)」だけでなく「捕虜にする (*cautivar*)」という表現も併せて記されていることから、「ガリガリに痩せ衰え」させた相手を「自分の影響下に置く」という意味要素が含まれていたことも理解できる。この場合も *dzoyzah* のときの解釈と同様、実際に戦場の敵を痩せ細った状態にさせるというよりも、相手が力尽きたことを象徴的に表現していたと捉えるべきであろう。本稿 2-7 でも述べた通り、戦争で敵を屈服させる行為を表すために、心身衰弱状態の象徴的存在であった痩せっぽちのイメージが利用されたと考えることができる。

では、なぜ戦場で自分が相手より体力的に優位に立つ必要があったのだろうか。*dzoyzah* の分析からは明確な答えは見つからなかった。しかし、本章の *baczah* の分析においてはじめて、「捕虜にする」というスペイン語での説明をもとに、敵を捕獲するためであったという答えを導き出すことができる。

戦争で敗れた人々は一体どのような運命を辿ったのであろうか。第一に、抵抗をあきらめ相手に屈服した人々はその場で釈放されることなく、その多くが捕虜として勝者の共同体へと連行された。これは意味グループ①例 3-1.2 に見られるように「屈服した人 (*rendidos*)」と「捕虜 (*cautivos*)」が同義として使用されていたことからわかる。第二に、拘束された敗者は勝者の財産として扱われた。グループ①の例 3-1.3 と 3-1.4 で戦争捕虜のことを「戦利品 (*despojo*)」と呼んでいることから推測できる。後述するように、ユカタン・マヤ人にとって捕虜とは戦争の勝者が獲得する利益であった。捕虜は勝者の財産であったため、敗戦側の敵政体が捕虜の返還を求めた場合は「身代金 (威信財)」を要求することができた^(註37)。第三に、拘束された敗者は奴隷として働かされた。グループ①の例 3-1.4 で *baczah* は「戦争での敗者、捕虜または奴隷 (*vencido, cautivo o esclavo habido en guerra*)」との記述がある。敗北者、捕虜、そして奴隷がすべて同じ名称で呼ばれていたことは、マヤ社会においては奴隷になることが戦争の敗者が辿る最終的な運命であったことを物語っている^(註38)。戦争での主目的の一つが奴隷獲得にあったことは、『ユカタン歴史地理報告書』等に記録されている当時のマヤ人の証言からも明らかである [RHGGYI:133, 146, 271, 378]。

敵軍の戦闘員を捕虜にすること、さらに連行した捕虜を奴隷として労働に従事させることは世界中の戦争で一般的慣行とされてきた。ではユカタン・マヤ人にとっての奴隷とはどのような存在だったのであろうか。ユカ

タン半島北部では、奴隷は上質なカカオやケツァル鳥の羽根など地元で手に入らない貴重な威信財との物々交換に用いられる極めて重要な「輸出品」であり、共同体と統治者一族の利益に大きく関わる財であった [RHGGY II:44]。同時に、共同体の日常の重労働や建造物建設のために欠かせない労働力でもあった。勝者の村 (共同体) へ連行された戦争捕虜は、そこで荷運び、水汲み、農作業、カヌー漕ぎ等の日常の重労働に従事する奴隷として働かされるか、威信財と引き換えに他の共同体、とくに半島から南西に位置するタバスコ (Tabasco) や南東のウルア川 (río Ulúa) 流域 (ホンジュラス) のカカオ生産地へ売られた [RHGGY I:82, 149, Díaz del Castillo 2011:47]。ただしその対象は庶民出身者がほとんどであり、捕虜となった統治者、貴族戦士、指揮官の多くは神々への生贄に供された [RHGGY I:165]。奴隷の取引および管理は、その財としての重要性から共同体の老貴族たちが取り仕切った (註39)。

baczah の意味をまとめると、名詞であればく軍事力でもって、力づくで体力を奪われ、相手の影響下に置かれた人>という抽象的レベルの意味特徴を抽出することができる。戦争の結果、抵抗力を失った人々全般を指したこの概念は、敗北者、捕虜、奴隷のいずれにも当て嵌まる。一方で動詞の場合は、<軍事力を用いて、相手の体力を失わせ、自分の影響下に置く>という意味となる。*baczah* という語が表した戦勝概念は、*dzoyzah* と同じく相手の体力を力づくで奪い優位に立つことに加え、相手の精神状態ではなく拘束した敵の扱いに意味の焦点を置いている。つまり *baczah* が表す概念には、束縛した敗者を管理下に置くという意味も含まれているのである。以上の分析結果から判断しても、*baczah* という語の意味の成立に関して、西洋概念の関与はなかったと言えることができよう。

戦争概念領域を含めた意味グループすべての相互関係を図示すると次のようになる (図5)。

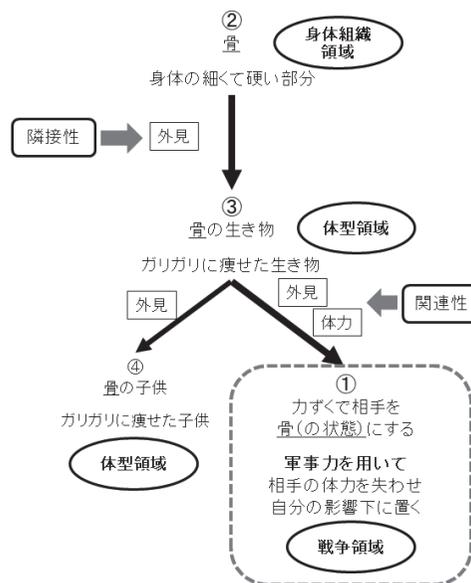


図5 BACの全意味グループの相互関係図

4. ユカタン・マヤの戦勝概念

第2章および第3章で分析した *dzoyzah* と *baczah* のユカタン・マヤ語での本来の意味内容を総合して考察す

ると、ユカタン・マヤ人にとって戦勝とは、激しい攻撃で敵の心身を病的に瘦せた人物と同様の状態にまで消耗させ、抵抗力を奪い拘束し、相手の身も心も自分の影響下に置くこと、さらには彼らを連行して奴隷の身分にすることを意味した。世界史上、敵軍を戦闘不能に陥らせる目的から、戦闘員が戦場で大量に殺傷されるケースがしばしば見られた。しかし、後古典期後期ユカタン半島北部での戦闘における主要目標の一つは、極力敵に致命傷を与えることを避け、戦意喪失した戦闘員および無抵抗の意思を示した非戦闘員をできるだけ多く捕獲することであったとすることができる。それは、戦争での主目的の一つが奴隷獲得にあったことが大きく関わっている。

一方で、王や主要指揮官を捕虜にすることは、奴隷や生贄の獲得以外にも重要な意味を持っていた。捕獲した敵首長に従属を誓わせることで、彼とその一族の支配領域および臣民を勞せずして自らの政治・貢納ネットワークに取り込むことができたからである [Gozawa 2017:55]。このように、戦場で敵を殺害するよりも生存させておくことによってより多くの利益が得られるユカタン・マヤ社会構造と、上記の戦勝概念が深く関係していることがわかる。

次に、<相手の体力気力を奪い、捕虜にして心身ともに自分の影響下に置くこと>というマヤの戦勝概念を、逆の視点、つまり戦場で劣勢に立たされた側の観点で解釈してみよう。心身共に「瘦せつぼち」となり拘束されない限り、たとえ戦場において防戦一方で多くの自軍戦闘員が戦死したとしても、ユカタン・マヤ人は必ずしも敗北とは考えていなかったと推測できる。スペイン軍がチャンポトン (Champotón) 王国で先住民と交戦した際のように、ユカタン・マヤ人は敵の攻撃に耐えきれないと判断すると、防衛に徹することなく簡単に首都を放棄し森へ逃げ込んだために、その後の追撃が困難であったことが記録されている [Díaz del Castillo 2011:18-19]。統治者とその一族、貴族臣下が自分たちの首都や共同体を死守する意志も見せず、平坦で密林に覆われたユカタン半島の自然環境を利用して素早く逃亡した行為は、敵に捕獲されれば自らの命だけでなく共同体の多くの利益が奪われることを知っていたからであろう。一旦戦線を離脱 (敵からすれば逃亡) しても敗戦したという認識は持っていなかったため、心身の平常を保ち続け、何度でも敵に再戦を挑むことができたのではないだろうか。

他方で、ユカタン・マヤ人が「瘦せつぼち (*dzoy*)」「骨 (*bac*)」という人間の身体に関係した言葉で戦争での勝利を表現していたことは興味深い。落合によれば、繰り返し行動に移され、語り継がれることによって長い時間を越えていく性質を持つ社会序列や宇宙観、行動規範等の保存困難な文化的要素のことを「やわらかい文化」という。この目に見えない文化には人間の身体感覚によって認識されたものが多く、深く身体に関係するがゆえに崩れにくく持続性に富む [落合 2004:171-186]。ユカタン半島の先住民の言葉は基本的に声の文化、つまり口頭で使用されていたので、その意味では「やわらかい文化」であった。先スペイン期にはマヤ文字が存在したが、その使用は一部の貴族が独占し、記述される内容は限られていた。本研究で分析された「瘦せつぼちにす」「骨の状態にする」を意味する *dzoyzah*、*baczah* も身体に関係した表現であったため、これらの語を戦争の度に繰り返し使用することで「敵を過度に殺害しない」という戦場での敵に対する行動規範も長い時間を越えて継続された可能性は否定できない。

古代においては、同一地域の地元政体同士の戦争にはルールがあった。それぞれが同じ武器と戦法を用い、勝ち負けの原則、開戦や戦後の和解の手続きにも一定のルールが適用された。戦争という暴力現象は必然的に社会に多大な損害を与え、多くの人命を奪ったため、当然捕虜の扱いについても同様にルールがあった。社会規範を定め遵守することで、大量虐殺や非戦闘員への暴行にある程度歯止めをかけることができた [橋爪 2016:21-22, 47-48, 51-54]。敵を「骨が浮き出るほど瘦せこけた者と同様の心身の状態」にさせて最終的に捕虜にするという

ユカタン・マヤの戦勝概念は、同じ民族同士、近隣同士での紛争による不必要な犠牲や損害を避けるための、戦争の暗黙のルール、戦争における秩序の在り方を示していたと言える。

5. おわりに

本稿では、ユカタン・マヤ語の戦勝概念について認知意味論の多義語分析の手法を使って分析し、ユカタン・マヤ人の戦勝と敗北に対する思考を復元した。その際、現代軍事理論の直接的な適用ではなく、先住民の概念体系の復元を通してマヤ社会における戦争を解釈したことで、従来のマヤ軍事史研究とは一線を画した議論を展開した。また、戦争捕虜の財としての共同体内での価値が戦闘規範に影響を与えたという、戦闘の背後に存在する共同体社会と戦争との関係にも焦点を当てた。今回は、戦争関連の単語を形態素レベルまで分析することで、「他者」である我々でも文書に記録されていないスペイン征服前後の先住民概念を復元できる可能性を示した。

メソアメリカ文化圏だけでなく、アメリカ大陸の他地域の先住民概念研究においても、単語の認知意味論的分析結果を、文献学、考古学、碑文学、民俗学など他の学術分野のデータも可能な限り活用することで、彼らの世界観、思考様式により深く入り込むことができる可能性が示されている。

本研究で実施された意味の典型性調査のための現代ユカタン・マヤ人へのインタビューについてだが、限られた期間での実施ということもあり対象者数は決して十分とは言えない。それでも、一次史料分析の補足データとして、対象語の基本的意味の理解に役立つことを提示した。16世紀語彙集のユカタン・マヤ語と現代マヤ語では同じ単語でも使われ方が多少異なることもあるが、本稿の例でもわかるように、日常頻繁に使われる基礎的な単語は400年以上経った現代でも変化していない場合が多い。対象者数、村数、語数を増やし継続することが今後の課題となろう。

【謝辞】

本稿の執筆にあたって、慶應義塾大学の小原正氏と加藤伸吾氏、明星大学の中野隆基氏に多くの有益なご指摘をいただいた。また二名の匿名査読者には適切かつ建設的なご助言をいただいた。記して謝意を表したい。

註

- (註1) 本稿では、後古典期後期の終わりはユカタン半島北部の征服が終了した16世紀と便宜上定めているが、実際には「スペインによる征服の完了まで」と定義される。なぜなら、チアパス、ベリーズ、グアテマラを含む広大なマヤ地域において、征服の完了時期は地域によって異なったからである。
- (註2) 認知意味論とは、認知能力、つまり人間が日常生活で無意識に行う比較、カテゴリー化などの知的・感性的作業との関連から言葉の意味を研究する分野である〔松本 2003:3-11, 48-49〕。ユカタン・マヤ人の戦争に関する世界観のうち「一対一の戦闘」および「敵」の概念に関しては郷澤 [2018] を参照。
- (註3) 同文法書の前半部分は動詞の活用、時制、接尾辞とその活用パターンなど文法解説を中心に構成されており、ユカタン・マヤ語の形態素を分析する際の手助けとなる。一方、後半は用語集である。
- (註4) この「辞典」は上記の4冊の語彙集を含む植民地期に編纂された写本をもとに作成されたため、二次史料として扱われる。しかし、編者が長年の内陸マヤ人村落滞在中に先住民から直接聞き取った当時(19世紀)の単語とその意味も記録されており〔DLM:V〕、他の語彙集に対し補完的な役割を

果たす。

- (註5) エンコメンデーロ (*encomenderos*) とは、スペイン王室から一定地域 (村) の先住民を委託され、彼らを改宗、教育する代わりに先住民から貢納を受け取りその労働力を使用する権利 (*encomienda*) を付与された者 (多くはコンキスタドール) のことである。
- (註6) 「基本的な意味」とは、ある語が有するすべての意味の中から話者がその語を聞いて連想する、例外的ではなく最も典型的な意味のことであり、慣習化の度合いが高いものである。認知意味論の用語ではプロトタイプ的意味 (*prototype meaning*) という [松本 2003:30-49, 141-142, 169]。
- (註7) 認知意味論の用語では「概念領域」のことを認知領域 (*cognitive domain*) またはフレーム (*frame*) という [松本 2003:65-67]。
- (註8) 意味の拡張は比喻を使って表現することによって起こり、そのプロセスとして、ある単語と物事間の類似性、二つの事物・概念の間の隣接性や関連性、あるいは一般的な意味を用いてより特殊な意味を表すことにより意味範囲を広げ、既存の言葉を新しい事物や考え方にも用いる。それぞれ言語学用語でメタファー (隠喩)、シネクドキー (提喩)、メトニミー (換喩) と呼ぶ [松本 2003:73-90]。
- (註9) スペイン語表記では、遺跡の名称は「Ek Balam」 (*Zona Arqueológica Ek Balam*)、村名は「Ekbalam」だが、本稿でのカタカナ表記は「エックバラム」で統一する。
- (註10) [dz]もしくは現代ユカタン・マヤ語アルファベット記号の[ts']は、舌先を上歯茎の裏につけ、同時に声門を閉じた後、内から外へ思い切り空気を開放させる。日本人が発声する「ツァ、ツイ、ツ、ツェ、ツォ」より強い発音。語彙集によって綴りは2通りある ([dz]と[ɟ]) が、本稿では常用アルファベットで構成されている[dz]を便宜上使用する。また、スペイン語で[z]はサ行/s/で発音される。[z]の代わりに[c]の綴りを用いる語彙集もあるが、本稿では常用アルファベットの[z]で統一している。
- (註11) ペレスの *DLM* にも記載されているが、これは明らかにペレスが参照した *AIM* からの引用である。
- (註12) 以下、語彙集の訳の中で植民地期当時の綴りで書かれている原文については、読者が読みやすいよう現代スペイン語の綴りに修正してある。
- (註13) 接尾辞 *-zah* で終わる語は、受身接尾辞 *-bal* を伴うと *h* が省略され *-zabal* という形をとる。さらに過去時制を表す接尾辞 *-i* が最後に置かれ、*-zabi* 「～された」となった。詳細は *AIM* [66-67, 81] を参照。
- (註14) 接頭辞 *ah* は行為者「～する人」を表す [BMT:30]。
- (註15) 名詞 *katun* は「戦争」の意味 [BMT:140, 376, DSF:184, 624]。[k] もしくは現代ユカタン・マヤ語アルファベット記号の[k']は、軟口蓋と後舌面で口腔を閉じ、同時に声門も閉じた後、内から外へ思い切り空気を開放させる。通常のカ行より強い発音。
- (註16) 接尾辞 *-al*、*-el*、*-il*、*-ol*、*-ul* は抽象名詞を形成したり、動詞を受動態に変形するなどさまざまな意味と機能を持つ [BMT:30-31]。
- (註17) この *flaco* というスペイン語には、見た目の特徴を表す「痩せ細った」という意味と、精神的状態を表す「弱々しい」「(精神的に) 弱い」という意味が存在する [Diccionario de Autoridades III] (以下 *DA* と略記)。しかし本稿で使用する5冊の語彙集の用例を見る限り、この語は「痩せ細った」の意味で用いられている。一方で *enflaquecer* はスペインでも一般的に「痩せ細らせる」の意味で用いられた [*DA* III]。
- (註18) スペイン語の動詞 *enflaquecer* は、再帰動詞として使われると通常「痩せ細る」「肉が減る」という

ように身体の変化を表す意味になる。DA III を参照。

- (註 19) [chh][ch] もしくは現代ユカタン・マヤ語アルファベット記号の[ch']は、舌端を硬口蓋に、舌尖を上歯茎裏の付根につけ口腔を閉じ、同時に声門も閉じた後、内から外へ思い切り空気を開放させる。通常のチャ行より強い発音。
- (註 20) *dzoyan* の *-an* または *-aan* は動詞の受身形「～された」である [AIM:73]。
- (註 21) 現代ユカタン・マヤ語の綴りでは *ts'ooy*、*ts'oya'an*。Martínez Huchim の現代マヤ語辞典 [2014:100] や Gómez Navarrete のマヤ語教科書 [2002:28] を参照。
- (註 22) 2020 年 2 月のエックバラム遺跡周辺 3 村で実施したインタビュー結果によると、全員がこの語は一般的に木材や棒、ひも、針金などに対して使われると回答した。
- (註 23) スペイン語の *cansar* (疲れさせる) の基本的意味は「体力を消耗させること (Fatigar a otro, haciéndole que se muela, se moleste, o pierda el sosiego)」である [DA II]。また *desfallecer* (衰弱させる) には気力と体力両方を失わせるという意味がある (Descaer o descaecer perdiendo el aliento, vigor, fuerzas, etc. padecer delinquo[deliquio]) [DA III]。
- (註 24) 植民地期スペイン語の *desmayar* は「気力を失わせる、または失う」という意味しか有しておらず、現代スペイン語の「気絶させる、失神する」というニュアンスは含まれていない。DA III を参照。
- (註 25) *argüir* には「相手の非や欠点を指摘し、相手を納得させながら非難する」という意味がある [DA I]。[th] もしくは現代ユカタン・マヤ語アルファベット記号の[tʰ]は、上下の歯を軽く開いた状態で舌尖を上歯茎近くの硬口蓋につけ口腔を閉じ、同時に声門も閉じた後、内から外へ思い切り空気を開放させる。通常のタ行より強い発音。
- (註 26) これを認知方略 (cognitive strategy) と呼ぶ [松本 2003:145]。
- (註 27) この意味の拡張現象を認知意味論用語でメトニミー (換喩) という [松本 2003.:82-83]。
- (註 28) 短槍、諸刃の木剣等の当時の武器については、RHGGY [I:67-68, 110, 235, 271, 319, 378, 390, II:85, 139, 296, 324]、Fernández de Oviedo y Valdés [1944 III:265, 267] を参照。
- (註 29) 語彙集には *baczahah*、*-te* と記載されているが実際は同じ意味である。*-tah* は他動詞の接尾辞で完了過去形を形成し、*-te* の変形 *-te* は命令形を表す [BMT:35]。
- (註 30) DLM にはもうひとつ “estar sobre aviso” という説明もあるが、こちらは編者のペレスが引用した DSF 中の *baczah* の例文「*ppix a ich hi cu baczahtech cizin: estás sobre aviso porque no te captives el demonio*」を誤認したものであると考えられる。「*estás sobre aviso*」は「*ppix a ich*」の訳である。DSF:16 を参照。
- (註 31) 有名なカスタ戦争はペレスが彼の辞典を編纂中であった 1847 年に勃発する。
- (註 32) ユカタン・マヤ語では、長母音を含め母音の読み方は単母音、高長母音、低長母音、再調音母音、声門母音の 5 通り (simples, largas-altas, largas-bajas, rearticuladas, glotalizadas) (a, áa, aa, a'a, a') ある [Vermont Salas 1984:7]。母音の長さ、高低差、声門を閉じるかどうかで意味が大きく異なることが多い。しかし、当時のスペイン人にはその違いが理解できず、読み方は区別されない場合が多かった (時折二重母音で違いが示された)。ユカタン・マヤ語ネイティブではない筆者による誤った解釈を避けるために、本稿では母音の綴りに関しては語彙集での綴りを尊重する。ただし、5 冊の語彙集では *baac* より *bac* の綴りが多数を占めるため、本稿では両者が同じ意味の場合は *bac* に統一して記載する。
- (註 33) *chay* のみで「骨だけのように見える痩せっぽち (flaco, que le parecen los huesos)」の意味がある

[DLM:88]。

(註 34) *timin* は「馬」 [CM:198]。

(註 35) 2020年2月実施のインタビューでも全員が即座に「骨」と答えた。それ以外の意味については、10人中3人が「角」と答えたのみである。

(註 36) 「死ぬ」「殺す」「死」「死者」の意味で最も一般的に使われた単語はそれぞれ *cimil* [BMT:477, CM:122, DSF:673] *cinzah* [BMT:465, CM:122, DSF:664] *cimil* [BMT:480, CM:122] *cimen, ah cimil* [BMT:480, CM:14] である。

(註 37) ユカタン・マヤ語の *loh* という動詞は「捕虜を請け戻す (*redimir al cautivo*) 」という意味である [BMT:563]。また *lohebal baczah* という語は「捕虜のために払われる身代金 (*rescate, lo que se da por el cautivo*) 」を意味する [CM:465]。

(註 38) 戦争捕虜が奴隷にされたことは、奴隷を表す別の単語からも理解することができる。*ppentac* (ペンタック) は「売買された奴隷、捕虜または使用人 (*esclavo comprado o vendido; cautivo o siervo*) 」 [CM:663]、*munach* (ムナッチ) は「女性捕虜、女奴隷または女使用人 (*cautiva, esclava o sierva*) 」 [CM:535] をそれぞれ意味する。

(註 39) カンペチェ州カルキニ村の先住民貴族たちがマヤ語で書き残した『カルキニ文書 (Códice de Calkiní) 』には、ガスパール・パチェコ率いるスペイン人コンキスタドーレスが同村にやってきたときに、征服者たちに供出するための奴隷を共同体で買ったとの記述がある。さらに、それ以前に買われた奴隷たちも、村の政治をつかさどる老貴族たちの指示の下で共同体名義で買われたと明記されている [Códice de Calkiní 2009:44-45]。

参考文献

青山和夫

2015 『マヤ文明を知る事典』 東京堂出版。

大越翼

2005 「対立と融合と」『マヤとインカ：王権の成立と展開』（貞末堯司編） pp.139-152、同成社。

落合一泰

2004 「文化を受け継ぐ—マヤ民族学への誘い」『マヤ学を学ぶ人のために』（八杉佳穂編） pp.165-187、世界思想社。

郷澤圭介

2018 「ちからをはかる：後古典期マヤの戦闘の一概念」京都外国語大学ラテンアメリカ研究所『紀要』18:1-23。

橋爪大三郎

2016 『戦争の社会学』 光文社新書。

松本曜 編

2003 『認知意味論』 大修館書店。

Barrera Vásquez, Alfredo (ed.)

1980 *Diccionario maya CORDEMEX: maya-español, español-maya*. Ediciones CORDEMEX, Mérida.

Beltrán de Santa Rosa María, Pedro

- 2002 *Arte del idioma maya (AIM)*, edición anotada y crítica de René Acuña. UNAM, México.
- Bocabulario de maya than (BMT)*
- 1993 René Acuña (ed.). UNAM, México.
- Brokmann, Carlos
- 2000 Armamentos y tácticas: evidencia lítica y escultórica de las zonas Usumacinta y Pasión. *La guerra entre los antiguos mayas, Memoria de la Primera Mesa Redonda de Palenque*, Silvia Trejo (ed.), pp.261-286, INAH, México.
- Calepino de Motul (CM)*
- 1995 Ramón Arzápalo Marín (ed.), tomo 1. UNAM, México.
- Códice de Calkiní*
- 2009 Introducción, transcripción, traducción y notas de Tsubasa Okoshi Harada. UNAM, México.
- Crónica de Yaxkukul*
- 1926 *Crónicas mayas: Crónica de Yaxkukul*, por Juan Martínez Hernández, Carlos R. Menéndez (ed.). Talleres de la Compañía Tipográfica Yucateca, S.A., Mérida.
- Díaz del Castillo, Bernal
- 2011 *Historia verdadera de la conquista de la Nueva España*, introducción y notas por Joaquín Ramírez Cabañas. Editorial Porrúa, México.
- Diccionario de Autoridades (DA)*
- Nuevo diccionario histórico del español. Recurso elaborado por el Instituto de Investigación Rafael Lapesa, <http://web.frl.es/DA.html>. Real Academia Española, Madrid. (最終閲覧日 2020年7月26日)
- Diccionario de San Francisco (DSF)*
- 1976 Oscar Michelin (ed.). Akademische Druck - u. Verlagsanstalt, Graz.
- Fernández de Oviedo y Valdés, Gonzalo
- 1944 *Historia general y natural de las Indias: Islas y tierra-firme del mar océano*, prólogo de J. Natalicio González, notas de José Amador de los Ríos, tomos 3, 8. Editorial Guaranía, Asunción.
- Gómez Navarrete, Javier
- 2002 *Maaya t'aan junp'éel: método para el aprendizaje de la lengua Maya, primer curso*. Universidad de Quintana Roo, Chetumal.
- Gozawa, Keisuke
- 2017 *La guerra entre los mayas del Posclásico Tardío: Conceptos, prácticas y proceso de expansión*. Tesis de doctorado en estudios mesoamericanos. UNAM, México.
- Guzmán Medina, María Guadalupe Violeta
- 2013 Lengua e identidad entre los mayas contemporáneos de Yucatán. *Anales de Antropología* 47(1): 57-71.
- Hanks, William F.
- 2010 *Converting Words: Maya in the Age of the Cross*. University of California Press, Berkeley, Los Angeles, London.
- Hassig, Ross
- 1992 *War and Society in Ancient Mesoamerica*. University of California Press, Berkeley.
- Landa, Diego de
- 1994 *Relación de las cosas de Yucatán*, estudio preliminar, cronología y revisión del texto por María del Carmen León

- Cázares. CONACULTA (Cien de México), México.
- Libro de Chilam Balam de Chumayel*
- 1941 Prólogo y traducción del idioma maya al castellano por Antonio Mediz Bolio. UNAM, México.
- López Cogolludo, Diego
- 1996 *Historia de Yucatán*, 3 tomos. H. Ayuntamiento de Campeche, Campeche.
- Martin, Simon and Nikolai Grube
- 2000 *Chronicle of the Maya Kings and Queens: Deciphering the Dynasties of the Ancient Maya*. Thames & Hudson, London.
- Martínez Huchim, Patricia
- 2014 *Diccionario maya, español-maya, maya-español*. Editorial Dante, Mérida.
- Mezeta Canul, Luis Ángel
- 2015 El Mercado de importaciones en Mérida entre 1811 y 1837. *Terceras Jornadas de Historia Económica*, Sandra Kuntz Ficker (coord.), tomo 2, pp.166-187. Asociación Mexicana de Historia Económica, México.
- Okoshi Harada, Tsubasa
- 2006 Kax (monte) y luum (tierra): la transformación de los espacios mayas en el siglo XVI. *El mundo maya: miradas japonesas*, Kazuyasu Ochiai (ed.), pp.85-104. UNAM, México.
- Pérez, Juan Pío
- 1877 *Diccionario de la lengua maya (DLM)*. Impresa literaria de Juan F. Molina Solís, Mérida.
- Relaciones histórico-geográficas de la gobernación de Yucatán (RHGGY)*
- 1983 Mercedes de la Garza (coord.), 2 tomos. UNAM, México.
- Repetto Tió, Beatriz
- 1985 *Desarrollo militar entre los mayas*. Maldonado Editores, INAH, SEP, Mérida.
- Ruz, Mario Humberto
- 1992[1985] *Copanaguastla en un espejo, un pueblo tzeltal en el virreinato*, segunda edición. CONACULTA, INI, México.
- Tejeda Monroy, Eduardo Arturo
- 2012 *La guerra en las Tierras Bajas Septentrionales mayas durante el Posclásico Tardío: Organización, desarrollo y táctica militar después de la caída de Mayapán*. Tesis de licenciatura en arqueología, ENAH, México.
- 2017 La fortificación en el área maya. Teoría, metodología y evidencias sobre los sistemas defensivos. *Historia y cultura: Ensayos en homenaje a Carlos Navarrete Cáceres*, Carlos Uriel del Carpio Penagos, et al. (coord.), pp.147-160. Universidad de Ciencias y Artes de Chiapas, México.
- Vermont Salas, Refugio, et al.
- 1984 *Alfabeto maya acordado en la reunión de agosto de 1984*. Comisión de Difusión del Alfabeto Maya, Mérida.

Los flacos y los huesos

— Un análisis semántico-cognitivo del concepto de la victoria entre los mayas yucatecos del Posclásico Tardío —

Keisuke Gozawa

(Universidad de Estudios Extranjeros de Tokio, Instituto de Investigación en los Estudios Globales)

Keywords: maya, guerra, Posclásico Tardío, victoria, análisis semántico-cognitivo

El presente artículo trata uno de los conceptos relacionados a la guerra entre los indígenas mayas del norte de la Península de Yucatán, México, en el periodo Posclásico Tardío (del siglo XIV al XVI d.C. aproximadamente), poco antes de la llegada de los españoles a dicha península.

El objetivo principal de este trabajo es reconstruir el concepto bélico de “victoria” entre los mayas yucatecos, la cual aquellos autóctonos reconocían de manera diferente en comparación al concepto de los conquistadores europeos, reflejando su valor de juicio social. Después de haberse reconstruido su concepto, se reflexiona la función de la guerra en su sociedad, que se suele interpretar desde el punto de vista occidental cotejándola con las descripciones de las fuentes históricas documentales de la época colonial.

Este trabajo se realizó para contribuir al desarrollo de la historia militar y la sociología de la guerra de los mayas del periodo correspondiente, de las cuales se ha estudiado poco. Por lo tanto, la presente investigación da un paso adelante para aquellos campos académicos arrojando luz sobre uno de los temas cruciales para esclarecer el significado de “entablar la guerra”. Al mismo tiempo muestra la posibilidad de reconstruir los conceptos indígenas en otras regiones del continente americano mediante la metodología lingüística que se emplea en el presente trabajo.

Los estudiosos han intentado comprender y reconstruir los aspectos visibles y tangibles de la guerra maya tales como armas, estructuras defensivas y tácticas bélicas gracias a las fuentes históricas documentales y arqueológicas. Sin embargo, por obvias razones aún no se observa avance del estudio sobre sus aspectos invisibles e intangibles, así como su modo de pensar acerca del fenómeno bélico; no están escritos explícitamente en las fuentes documentales novohispanas, tanto por los españoles a causa de la falta de interés como por los propios mayas debido a la falta de necesidad de dejarlos escritos.

Como metodología se realizó enfoque lingüístico llamado análisis semántico-cognitivo, en el cual se analizan los campos semánticos de los términos de maya yucateco obtenidos de “vocabularios” o diccionarios maya-español recopilados durante la época Colonial por los frailes españoles. Este método ya se ha utilizado en el estudio de la concepción maya en las últimas décadas y se comprobó su eficiencia; primero se divide una palabra relacionada con “victoria” en morfemas, y luego se analizan varias acepciones que tiene cada morfema con el fin de descubrir su significado fundamental. Finalmente se interpreta el significado original de aquella palabra, el cual los españoles no dejaron registrada.

En el presente trabajo se examinaron dos palabras: *dzoyzah* (“victoria, rendir en la guerra” en español) y *baczah* (“rendir y capturar en la guerra”). Resulta que el morfema *dzoy* tiene la acepción principal de “flaco, enflaquecer al otro”. En

cambio, *bac* tiene significado fundamental de “hueso, huesudo”. Estos dos morfemas, combinados con el sufijo compulsivo -*zah*, representaban “enflaquecer al otro disminuyendo su condición física y mental, y ponerlo bajo influencia suya”. Este concepto autóctono de “victoria” implica que los guerreros mayas trataban de no causar heridas mortales a sus enemigos para poder atraparlos y llevarlos como prisioneros a su pueblo. Estos dos términos reflejarían su regla en la guerra para evitar daño y muerte innecesarios durante los conflictos armados entre los pueblos y reinos colindantes que pertenecían en la misma sociedad y cultura.

Llevar vivos a los enemigos vencidos cobraba gran significado para los mayas yucatecos ya que los cautivos de guerra estaban destinados a ser esclavos o vendidos a cambio de artículos suntuosos, por lo cual los consideraban como importantes bienes de la comunidad. Por otra parte, al capturar a los gobernantes y capitanes los vencedores podrían incorporar la red política y tributaria de los vencidos sin mayor esfuerzo si lograban conservarlos como subordinados.

原稿受領日 2020年5月20日

原稿採択決定日 2020年9月4日

